

聖書箇所：ルカの福音書 8章 1～15節

説教題：実を結ばせてくださる方

1 実を結ぶ者となりなさい

きょうの箇所は新約聖書の中で「種まきのたとえ」として比較的よく知られている箇所です。

種は、神のことばを現しています。その種がどこに落ちたかで四つの例が挙げられています。

一つ目は、みことばを聞いたけれど、後から悪魔が来て、彼らが信じてくれないように、その人の心から、みことばが持ち去られてしまう場合。

二つ目は、みことばを聞いたときは喜んでいただけ、試練のときになると身を引いてしまう場合。

三つ目は、みことばを聞いてはいるけれど、この世の心遣いや、富や、快樂で実が熟するまでに至らない場合。

しかし四つ目だけは違って、正しい、良い心で聞いた人たちは、しっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせることができた。

このたとえ話を聞き、多くの方はこんなふうに思うのではないのでしょうか。「イエスは私たちに実を結ぶ者とならなければならぬ、と命じておられる。そのためには、どんな試練にも耐え、この世のことで心を煩わしていくのではなく、正しい、良い心でみことばを聞くことが大切だ。」

素直な方は、こんな結論を引き出すと思います。

2 疑問

(1) 神のことばには力がないのか

でも私はひねくれた性格なので、素直にそんなふうには思えない。二つの疑問が湧いてきます。一つ目の非常に素朴な疑問。「神のことばって、こんなに力がないのか。」

たとえの最初には、みことばを聞いても悪魔が来て、彼らが信じて救われることのないように、その人たちの心からみことばを持ち去ってしまうとあります。これを読んだらだれでも思うのではないですか。神のことばより悪魔のほうが強い。試練にあうとみことばは簡単に枯れてしまう。神のことばよりこの世の富や快樂のほうが強くて、簡単にふさがれてしまう。どれを見ても、私たち人間の努力や助けがなければ、芽を出し、成長し、実を結ぶことはほとんど難しい。

どこかで、神のことばには力があると聞いた記憶があるのですが、この箇所の印象は正反対です。神のことばである聖書を大切にしてきたつもりだけれど、こんなに力がないというのなら、少し不安になってしまいます。

(2) 正しい、良い心の人はいらぬのか

二つ目の疑問。15節で「正しい、良い心でみことばを聞く人」が出て来ます。この世の中に「正しい、良い心の人」はいらぬのだろうか。だって聖書にはこうあるのです。「人の心は何より陰険で、それは直らない。」(エレミヤ書 17章 9節) 神の前には、だれひとり正しい者もいなければ良い心を持つ者もない。人間はみな罪人である。それが聖書

が最初から言っている事です。

聖書で言われなくても、自分のことを見れば明らかです。「私は正しい人です。私は良い心を持っています」と自信をもって言える人がいますか。もし言える人がいるとするなら、その人はおそらく自分のことがよくわかっていないだけでしょう。ではどこに、正しい人、良い心を持つ人がいるのでしょうか。どこに、実を結ぶことができる人がいるのか。なんだか怪しくなってきました。

もし、ひとりも実を結ぶにふさわしい正しい人がいなくなると、どうなるか。イエスのもとに、方々の町や村から大ぜいの人たちが来ました。イエスはその人たちに様々なことばを語りました。けれども、どんなにみことばを宣べ伝えたとしても、この地上では何一つ実を結ぶことはできない。イエスが一生懸命種を蒔いたのに全部無駄であった。そういう結論になってしまいます。

でもこれはどう考えてもおかしい。何かの間違っていています。

(3) 努力すれば？

ある方は言うでしょう。もちろん、私たちは最初から良い人にはなれない。でも努力すれば少しずつ良い人になっていくのではないか。

ではお聞きします。イエスは、悪魔が来て、私たちの心からみことばを持ち去ってしまうことがあると警告しています。それに対して私たちはどんな対策をするのでしょうか。

「悪魔が来てみことばを持ち去ってしまわないように気をつけましょう」と言って済むならだれも苦労しません。

イエスは警告しました。「試練のときになると、身を引いてしまう。」どんな対策をし

たらいいでしょう。「試練のときもがんばって信じていきましょう」と言いますか。それで済むのなら、とっくの昔に皆さんがしています。

イエスは警告しました。「この世の心づかいや、富や、快樂がじゃまをすることがある。」どんな対策をしますか。「この世の富や快樂ではなくイエスに目を留めて歩みましょう」と言いますか。それができるのならだれも苦労しない。

多くの方は、ここを読んでつらく感じる方ではないのでしょうか。どうしてつらく感じてしまうか。だって、まさにここにあるように、みことばを聞いても試練が来るときっと身を引いてしまう者だった。日曜日、教会に来てみことばを聞くのですが、教会を一步出してしまうと、この世の心遣い、富のことや快樂のことですぐにところがふさがれてしまうような者だ。もちろん、そんなことではだめだと自分を責めて、改めようと努力はした。けれども挫折の連続した。

努力して15節のような人になれと言われて、できるのでしょうか。皆さんは身にしみて味わってきたはずです。できない！では、イエスは不可能なことを私たちに押しつけているのでしょうか。そんなはずはありません。

神は最初からご存じです。11節から14節に書かれているようなこと、これが私たちの本当の姿であると知っておられる。努力すれば正しい人間になれるとか、良い人になれるとか、罪からきよめられていくとか、そんなことができないと最初から知っておられるのです。

3 イエス・キリスト

(1) 正しい、良い心を持つ方

ではこの15節、いったい誰のために語られているのでしょうか。

先ほど、この世には正しい、良い心を持つ者はひとりもないと言いました。しかし良く考えてみますと、ただおひとりだけ例外がありました。イエス・キリストです。この方は神でありながら、人間となって私たちのところに来られました。最初から罪のない方でした。そのことを裏付けするようにマタイの福音書19章17節でこう語ります。「イエスは彼らに言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。」イエスは、はっきりとは言いませんが、良い方とはご自分のことであるとのめかしております。

そうしますと、15節はいったい誰のことについて語っていることになりますか。そう、イエス・キリストです。この15節は、私たちのことではなく、イエスのことを語っている。

しかし、疑り深い人は思うでしょう。「自分で自分のことを、私は正しくて良い人です、と主張する人など信用できない。」私たちはこんな人たちに何度もだまされてきました。自分だけが傷つかず、安全なところ立って言っているのならおおいに疑うべきです。では、イエスはどこに立って、このようなことを言っているのか。

(2) 苦しみを味わう方

神はイザヤを通し、やがて遣わされてくる救い主について次のように語りました。

「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばな

かった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」(イザヤ書 53 章 3~6 節)

変な言い方になりますが、このみことばを主は聞かれます。みことばの種はイエス・キリストのところに落ちます。主は、このみことばをしっかりと守り、よく耐えて、十字架の苦しみを味わわれました。この方は良い地となられ、実を結ぶ者となってくださいました。

どんな実を結んだのでしょうか。ひとことだけ言いましょう。「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」

これがこの方が私たちに与えてくださった大きな実であります。別のことばで言えば、救いと言うことになります。その実を私たちはただでいただいている。

主は安全なところに立って「わたしは正しく良い心を持っています」と言ったのではない。十字架におつきなりながら語っていました。

(3) 実を結ばせてくださる方

そこで、きょうの結論です。15節は、私たちに言われているものではありません。私たちが実を結ぶものではありません。イエスが実

を結んでくださいます。その実を、私たちはそのままただでいただくだけです。いただいて、それで終わりというではありません。実をいただいた者は変えられていきます。主は私のうちにあるわずかな良いところを見つけ出し、そこで実を結ばせてくださいます。

最初、神のことばには力がないように感じられました。いいえ。神のことばはイエス・キリストに働かれました。十字架において大きな実を結び、こんな私たちにでさえも実を結ばせる力を与えてくださいました。

実を結ばせてくださる主を仰ぎ見たいと願います。